

教育心理学と看護教育

— 看護学生論の学的視座 —

神戸市立看護短期大学

森田 チエコ

司会 金沢大学医療技術短期大学部

金川 克子

1. 看護学生論の学的視座の意義

一般に看護学生論は多く存在するが、科学的資料にもとづく論議はまだ十分ではない。すなわち、「らしく」、「～であるべき」のような経験的、現象的認識による看護学生や看護教育論ばかりでは、時代の要請に応える多様な能力をもつ看護婦の教育論としては科学的論拠に乏しく、発展性が少ない。そこで、看護教育研究に教育心理学で開発された理論や知見を参考に独自の分野をもち、看護教育をより効果的、発展的にする必要がある。教育の主体である学生の特質を尊重し、そのレディネス（学習の準備状態¹⁾）やモチベーション（学習の動機づけ¹⁾）等を多角的に解明し、その実証的資料により学生の教育の方法や条件を調整して学習生活への適応を容易にするような看護教育の研究が、今後一層求められよう。そこでは、この看護学生論をめぐる研究が看護教育学研究の重要な分野ともなることであろう。今回は、看護学生論の研究の接近に焦点を置き、その工夫といくつかの提案を試みた。

(教育における評価の位置づけ)

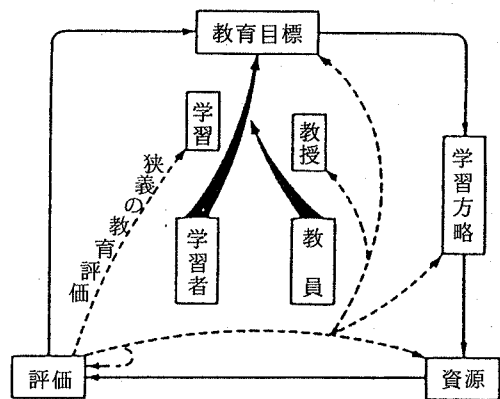


図1 教育のプロセス

(教育心理学的概念の構図)

2. 看護学生論にかかわる教育心理学のおもな領域と教育のプロセス

教育の場における教授・学習過程¹⁾²⁾⁵⁾¹⁴⁾（教育のプロセス；図1参照）をより効果的にするためには、教育心理学のおもな領域の概念¹⁾³⁾⁴⁾（発達、学習、人格、適応、教授・学習過程、評価など）を看護教育の研究に導入する必要がある。したがって、看護学生を中心とする教育の場における教育心理学的概念の構図は、図2のようになる。筆者らは、看護学生のもつレディネスやモチベーションを中心に研究的接近を試みた。（1）レディネスとしては、人格、認知、情緒、精神運動、学習能力、学習習慣、生活行動能力等

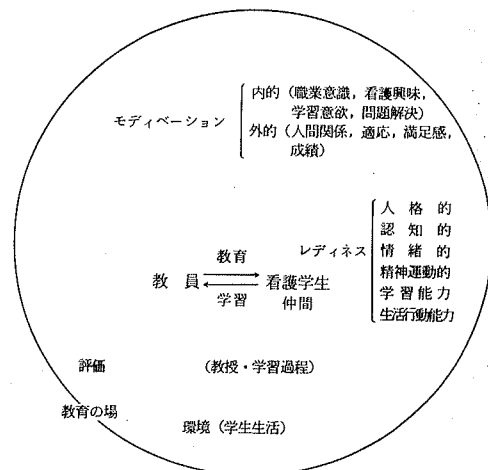


図2 看護学生に関する研究的枠組

が望ましく準備されること、また(2)モチベーションとしては、職業意識、学習意欲、看護の興味、問題解決への態度、人間関係、環境への適応、満足感、成績(評価)の結果などの内的、外的な学習の強化要因の状態を重視した。すなわち、教授・学習過程²⁾⁵⁾を中心とする教育の場の中で学生が良好な教育成果を修めるためには、看護学生をめぐるこれらの条件を明確にし、その状態に応じた教育の方略を探究しようと考えた。

3. 看護学生の研究への若干のアプローチとその技術的課題

看護学生がもつ教育心理学的課題を解明する手がかりとしてすでに試みた研究例の中で技術的に特徴のある3例を素材に看護教育学研究のあり方や今後の方向について発展的に探究してみた。

1) 学習意欲に関連する要因を縦断的に検討した研究例：看護学生の学習意欲の変化とそれに関連する要因の研究、第10回日本看護学会教育分科会集録、91-93、1979。

本研究は⁶⁾⁷⁾、2年過程看護短大生147名の入学時(I)から2年次実習前(II)と卒業時(III)までの学生の学習意欲をめぐることがらを段階的に追跡した縦断的研究の例である。

また学習意欲、看護職への態度等の質問紙も文献をもとに独自に作成し、信頼性、妥当性を調べて用いた。さらに学習意欲に関連する要因の検討には多角的資料を統計的に処理し、ことに相関関係を重視した。

その結果、2年過程看護短大生の学習意欲は、学習途中の2年次実習前に低くなったが、卒業時には入学時よりさらに高くなり、看護職の方向に動機づけられていた。また学生の学習意欲は、(1)学校への期待、学習生活への適応や満足感、(2)看護職業意識と態度、(3)実習への不安などがより多く関連することがわかった。

2) 信頼可能な測定道具の引用と他集団との比較、および看護学生の学習習慣・態度の因子構造の解明の研究例：看護学生の学習生活の構造に関する研究、1. 一般大学生との比較、2. 看護短大生の学習習慣・態度、日本看護研究学会雑誌、6(1)、51、1983; 8(臨)、62、1985。

研究結果を一般化したレベルで検討するには、信頼

可能な測定道具(尺度)による実証が必要となる。この場合、追試研究によることも一案であろう。

林、滝本⁸⁾は、大学生の学習習慣・態度の構造を精選した69項目の質問紙を用いて首都圏の国公私立、文・理系大学生男子、女子の計673名を対象に調査し、近年入学の大学生の学習技術(スタディ・スキルズ)の問題に着目し、ことに学生生活に不適応感をもつ学生にこの問題が多いことを報告していた。そこで本報⁹⁾¹⁰⁾は、この質問紙を引用し、看護学生の学習習慣・態度を比較した。(1)看護短大生(公立2校、219名)の学習習慣・態度は、学習の方法(第1因子)、学習興味と学習姿勢(第2因子)、学習意欲・計画性(第3因子)、情緒性(第5因子)については、大学生男・女子よりも低かったが、学習の手ぎわのよさ(第4因子)のみやや良好であった。(2)看護短大生の独自の学習習慣・態度を因子分析した結果では、11因子が抽出されたが、そのおもな因子は、第1因子(学習興味と姿勢)、第2因子(学習方法)、第3因子(学習に対する計画性と情緒性)、第4因子(情緒性)、第5因子(学習の手ぎわ)、第6因子(学習意欲と情緒性)であった。(3)看護短大生の学習習慣・態度の因子構造は、大学生女子よりも大学生男子の場合に類似していたが、情緒性がより多くかかわった女子の特徴をも示していた。(4)短大女子学生間の学習習慣・態度の構造では、理系・資格型と文型・教養型の短大生のタイプに分れたが、看護短大生は前者の特徴を示していた。

3) 学生のレディネスを測定する道具を開発する研究例：看護学生の学習への適応の予測—入学時、生活行動能力調査による、日本看護研究会雑誌、11(臨)、100、1988¹¹⁾。

学生の日常生活状況(衣食住、対人関係、健康生活の5領域)の質問紙(32項目、4段階尺度)を文献をもとに独自に開発し、他資料との関係を調べ、過去5年間実施した結果、入学後における看護の学習への適応の予測が可能となり、教育的対応に有効であることがわかった。すなわち、(1)生活行動能力調査の測定道具としての信頼性、妥当性、因子構造の確認などの検討を重ねた。(r=0.719)(2)生活行動能力の諸側面を①生活行動能力の経験度、②習熟度、③家庭生活の反映度、④感覚度、⑤自立度、の5側面について検討の結果、入学時学生の生活感覚は予想外によ

かったが、生活の経験領域は概して乏しく、また複雑な習熟を要することは不得手であり、生活面の自立はまだ不十分な段階にあり、入学後に徐々に自立へ向ったが、学生個人への家庭生活の反映は少なかった。

(3) 生活行動能力と他の関連資料との関係では、入試成績、高校の家庭科成績、入学後の生活科学、看護学概論などの知識面との関係は特になく、看護技術、臨床実習の行動面の成績とにきわめて低いながらも有意な相関関係が認められた。(r = 0.171~0.226)

(4) 学生の生活行動能力の平均得点を中心に±10の4分領域に分け、上位I群と下位IV群の学生とを比較した。IV群学生は、入試成績では問題はなかったが、他の関連資料の結果は全体に低く、ことに看護技術等の行動面の学習が他群より著しく低く、休・退学の例も多い傾向にあった。(5) 入学から卒業時までの追跡¹²⁾を看護実習を中心に検討したが、入学時の生活行動能力が看護の学習に影響を残すのは、2年次後期頃までであり、それ以後は各学生の多様な能力で学習を進展させていた。

以上より看護教育学研究の今後の技術的課題としては、(1) 教育心理学の理論や知見を参考に看護教育学研究の展開、(2) 研究計画における独立、従属変数の明確化と仮設検証の研究の試み、(3) 研究方法の横断、縦断の企画による一般化、(4) 研究結果の分析技術の多様化(信頼性、妥当性、相関関係、因子分析、要因分析、多変量解析など)、(5) 教育効果等の測定道具(評価尺度)の開発などが期待されよう。

4. 看護教育学研究における看護学生論の研究の方向

看護教育が専門職業教育の側面をもつならば、学生の個別的習得能力差を最小にして有能で均質な水準の卒業生を多く輩出することにある。そのためには、伝統的な教育方法によるよりも Bloom B. S.¹³⁾¹⁴⁾らが主唱する“完全習得学習”の方法が望ましく、注目されている。すなわち、この学習法は、対象学生の認知、情意、精神運動の各領域の均衡のとれた総合的発達をはかる方法であり、学生のレディネスを事前に評価(診断的評価)し、それによる学習を計画してその学習過程で中間テスト(形成的評価)をすることにより学習者に合わせた授業展開に調整し、最終テスト(総合評価)をすることにより図3²⁾に示すように

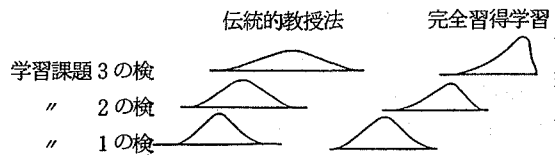


図3 伝統的教授法と完全習得学習の理論的な学業成績の分布 (Bloom, 1976)

“伝統的教授法”とは異った著しい達成度を目標としている。ことに“完全習得学習法”では、対象者のほぼ全員が高い習得度に達するには、個々の学生の特性に応じた A. T. I.¹⁾ (Aptitude Treatment Interaction, 適合性交互作用: 対象学生の能力や適性の型と教師の指導方法との関係がより効果的であるための確認) による指導方法のアプローチを行う学習の工夫が大切である。A. T. I. の機能を生かして学生のもつレディネスやモチベーション等を有効に測定・整理し、より学習者個人に適合した学習指導の方法(教授活動・計画)が工夫されることが、看護教育学研究¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾においてきわめて重要なことである。そこにおいては、この看護学生論の研究が教授・学習過程を中心に看護教育学研究の発展により期待されることであろう。

文 献

- 1) 波多野完治(監): 学習心理学ハンドブック, 33-43, 361-404, 539-602, 633-648, 金子書房, 1968.
- 2) 松田, 松田(共): 教授心理学, 62-157, 明治図書出版, 1984.
- 3) 依田 新: 教育心理学, 1-395, 金子書房, 1950.
- 4) 松山, 倉智(編): 現代教育心理学要説, 76-200, 北大路書房, 1980.
- 5) 日本医学教育学会(監): 医学教育の原理と進め方, 69, 篠原出版, 1978.
- 6) 森田, 小野寺, 波多野: 看護学生の学習意欲とそれに関連する要因の研究, 第10回日本看護学会教育分科会, 91-93, 1979.
- 7) 波多野, 森田, 小野寺: 看護学生の学習および看護職に対する態度の発達の变化, 看護教育, 23(8),

- 513-520, 1982.
- 8) 林・滝本：大学生の学習習慣，学習態度の構造と性格傾向との対応，相談学研究，13(2)，18-25，1981.
- 9) 森田，西田，志賀，深瀬：看護学生の学習生活の構造に関する研究，1. 一般大学生との対比，日本看護研究学会雑誌，6(1)，51，1983.
- 10) 西田，志賀，森田，深瀬：看護学生の学習生活の構造に関する研究，2. 看護短大生の学習習慣・態度，日本看護研究学会雑誌，8(臨)，62，1985.
- 11) 中村，西田，森田：看護学生の学習への適応の予測—入学時，生活行動能力調査による，日本看護研究学会雑誌，11(臨)，100，1988.
- 12) 中村，西田，森田：看護学生の学習への適応の予測(2)—入学時生活行動能力と看護実習成績の追跡的研究，日本看護研究学会雑誌，12(臨)，135，1989.
- 13) Bloom B. S.，梶田(訳)：教育評価ハンドブック，第一法規出版，1973.
- 14) Dorothy E. Reilly，近藤，助川(共訳)：看護教育における行動目標と評価，34-76，医学書院，1980.
- 15) 波多野梗子(監)：看護教育学，10-24，医学書院，1976.
- 16) 金川克子：看護学生の教育に関する研究の実際，日本看護科学学会誌，1，10-11，1981.
- 17) 杉森みど里：看護教育学，149-187，医学書院，1988.
- 18) 遠藤辰雄：アイデンティティの心理学，ナカニシヤ出版，1981.
- 19) Maslow, A. H.，小口(訳)：人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ，産業能率大学出版部，1987.
- 20) 永沢幸七：女子大生の生活と心理，大日本図書，1979.
- 21) 関，返田(編)：大学生の心理—自立とモラトリアムの間ゆれる，有斐閣，1983.